

壁を壊すケア 「気にかけてあう街」をつくる

2021 年 12 月、オンライン配信による本シンポジウムを開催しました。

子育てや教育、高齢者、障がい者などが関わる社会課題には、“心の壁”や“専門家の壁”が立ちほだかります。当協会では「Better Life 研究会」を設置し、日々現場で奮闘する実践家の方々と社会課題にまつわる壁をどう壊せるかについて対話を重ねてきました。その成果は、書籍『壁を壊すケア「気にかけてあう街」をつくる』（岩波書店）にまとめられています。

シンポジウムでは研究会を踏まえ、ケア（気にかける）の考え方にもとづく地域づくりについて 2 部構成で考えました。進行はアナウンサーの渡辺真理氏が務めました。

■全労済協会理事長 神津里季生 挨拶要旨

「政策が実現すれば、世の中はよりよいものになるでしょう。しかし政策や制度だけでは十分ではありません。そこには気にかけて、ケアをするといった人の気持ちが噛み合っていることが重要なのです。またそうした気持ちは、私たち一人ひとりが持ち合わせているものと私は信じています。今日の講演を聞いて、「すごいな」で終わるのではなく、みなさんの“支え合う”取り組みの糧にさせていただければと思います」



神津里季生理事長

■第 1 部：トークセッション

第 1 部では、研究会主査で慶応義塾大学経済学部教授の井手英策氏と渡辺真理氏が、それぞれの体験を交えながら地域の壁を壊すことの必要性について、トークセッションを行いました。



井手氏 私は 2019 年に、佐賀の実家に住む母と叔母を亡くしています。原因は火の不始末でした。母は脳が委縮する病で話せない、聞こえない、動けない状態で、叔母は認知症を患っていました。この一件を通じ、私はとても考えさせられました。実家に戻って介護をしていればよかったのか、ふたりを神奈川の自宅に住まわせるべきだったのか。

けれども家には 4 人の子どもがいるし、見知らぬ土地の狭い家に閉じ込めてお

くことが正しいとは思えません。対する渡辺さんは、20年以上にわたり介護をなさっています。

渡辺氏 祖父が建てた家に、両親も一人娘の私もずっと住んでいるものですから、介護というより、暮らし続ける中で祖父母や両親の人生の移ろいを一緒に体験している感覚の方が近いんです。労う言葉をかけていただくこともあって、ありがたく感じるのですが、同居がいいと言い切れるわけではないと思っています。

井手氏 渡辺さんのエッセイに、お母様の前歯が知らない間に欠けていて、そのときニコッと笑った表情がかわいらしかったというエピソードがあります。その話を読んで、私は涙が止まらなくなりました。というのも私は老いた母の笑顔を見て、ゾッとしたことがあったんです。子育てに加えて介護で負担するお金が浮かなくて、これ以上どうすればいいんだって。一瞬ですが「いつ死んでくれるんだろう」という思いも過りました。だから渡辺さんの話に心が揺さぶられたのと同時に、子どもたちには私と同じ気持ちにはさせたくない、愛する人が生き続けると周りには不幸になる世の中はおかしいと強く感じました。

渡辺氏 親との距離によっても家族構成によっても事情は全く変わりますよね。きれいな事を言うつもりも全くないんです。私が井手先生の立場だったら、同じ感覚だったのじゃないでしょうか。ご自身の感情を率直に言葉にされる先生は、とても勇気があると感じています。

井手氏 母たちは私を東京の大学に送り出すのに、闇金にも手を出しました。厳しい取り立てにあい、私の父違いの姉夫婦が実家から離れたところに家を建て、母たちと暮らし始めました。でもそこにも取り立てがやって来て、縁のない土地で近所の人たちとうまく関係を築けなかった。地域には、頼れる友達がいなかったのです。どんな思いだったのだろうと。



井手英策氏

渡辺氏 ご著書の中でも先生は後悔を記していらっしゃいますが、僭越ですけれども、お母様も叔母様もお幸せだったと私は感じます。苦勞して育てられた井手先生が立派に成長され、先生の言葉に励まされている方がたくさんいらっしゃるのですから。

井手氏 私はこれまで医療に教育、育児や保育、介護のサービスを「ベーシックサービス」と名付け、必要な人にくまなく提供する仕組みを考えてきました。もしベーシックサービスが受けられる社会が実現していれば、ふたりは助かったのではないかと。なぜなら姉夫婦に老後の不安がなければ、60歳を過ぎて働きに出ることなく、家にいたような気がするからです。すぐ火事に気づいて、全力で母と祖母を助けたと思うんです。

もうひとつ、母と祖母は介護サービスを受けていました。素敵なヘルパーさんやケアマネージャーさんに囲まれ、幸せな時間を過ごしていたと思います。けれども、ふたりが地域に溶け込めずにいる状況は、いつまでも変わることがありませんでした。でも、もし福祉の専門家みなさんが少しおせっかいを焼いて、母たちと近所の人たちの間に立ちの壁に一步踏み込んでくれていたら、もう少し違ったのではないかとも思います。つまりベーシックサービスとソーシャルワーク社会を、どう組み合わせるのかというのが、私にとって切実なテーマになっているのです。

渡辺氏 私の義両親は先のことを考え、長男である夫の近くに住んだ方がいいと、80歳を過ぎて故郷の神戸から横浜に引っ越してきてくれたんです。それから間もなく義父が癌で倒れ、ヘルパーさんの手が必要になったときに義母は強い拒絶反応を示しました。



渡辺真理氏

これまで完璧に主婦業をこなしてきただけに、外からの人手に対するアレルギーは相当なものでした。そんな時、実母を担当するケアマネージャーさんが義母のもとを訪ねておしゃべりしてくれて。今ではすっかりお世話になっています。サービスを受ける、助けを借りることは大切だと感じています。

井手氏 渡辺さんのお話を聞いていると、幸せの循環が生まれていますよね。私とは対照的だなあと。私は常に欠乏感を抱えている気がするんです。どこか失敗した、何か足りない、もう少しできるのにといった気持ちが、自分を動かしているというか。

渡辺氏 失礼を承知で申し上げますと、それもよかったです。お母様と叔母様への思いが先生のエネルギーの源となって、駆り立てている。そして井手先生を通して、世の中全体をよくしていこうとされているわけですから。

井手氏 確かに。母と叔母は、私の中にとつともない後悔や反省や欠乏感を残していきました。でもそれが、未来を生きる子どもたちに同じことを繰り返してほしくない、少しでもいい世の中にしなくてはという原動力になっていますね。

Better Life 研究会のメンバーは実践家ばかりです。メンバーたちは日ごろ孤独な戦いを強いられています。けれども同じ思いや悩みを抱えていて、苦しんで泣いて、そして現場に持ち帰ってまた頑張ろうと、研究会が思いに火を点ける場になっていました。

■第2部：パネルディスカッション

第2部では Better Life 研究会に参画した3人のソーシャルワーク（暮らしに密接なサービスを提供しながら、人の置かれている状況や構造に働きかけること）の実践家をパネラーに交え、井手氏のコーディネートによるパネルディスカッションが行われました。

【パネラー紹介】

石井正宏氏が理事長を務める NPO 法人パノラマでは、高校と連携して図書室やラウンジに「校内居場所カフェ」を開設。生徒が保護者や教師以外の大人に気軽に悩みを打ち明けたり相談できたりする場をつくることで、中退や引きこもりなど社会からの孤立を防ぎ、格差の広がり食い止める活動をしています。



馬場拓也氏は、神奈川県愛川町にある社会福祉法人の2代目。地域に開いた施設運営を徹底しています。先代から受け継いだ特養ホームは周りの壁（塀）を解体し、庭をオープンスペースに。「日常の営みをまちの風景にする」という発想で、入居者と近隣の人との交流が生まれています。また保育園も障がいの有無や年齢に関係なく一緒に過ごせる空間にするなど、高齢化の進む地域をあたためることに取り組んでいます。

名里（なり）晴美氏は大学を卒業後、地域作業所への就職をきっかけに障がい者施設の運営に携わるようになり、先代から受け継ぐ形で2010年より法人の代表を務めます。重度の障がい者を受け入れる施設「朋」は建設当時、地域住民の強い反対にあいました。それでも「障がいのある人が生きやすい街は誰もが生きやすい」という考えのもと、丁寧な説明と対話を重ねて開設を実現。以降、利用者と地域の人々が直接交わる関係を築き続けてきました。

井手氏 研究会やシンポジウムのテーマである、「壁」について聞きたいと思います。今の自己紹介にも、名里さんは「障がい者施設は地域になじまない」という偏見の壁、石井さんには若者が労働にも福祉にもたどり着けない壁がありました。馬場さんは施設の内側にいる高齢者の壁を、物理的に破っています。具体的に、どのような壁に当たり、どう乗り越えたのでしょうか。

石井氏 ひとつは地域の壁ですね。学区制の廃止で、近隣の子どもが地元の高校に通っていないということも珍しくない。すると学校が、地域にとって得体の知れないものになってしまうんです。カフェにも近所のおばさんが、偵察を兼ねてボランティアに来ることもありました。でも実際に生徒と接すると、彼らに完全にほだされちゃって、それから協力的になってくれることもあります。もうひとつは先生の壁ですね。先生方は学校という場



石井正宏氏

や社会に、うまく適応できた方がほとんどなんですよ。だから、通えなくなる子とは生きてきた環境も文化も言葉も違って分かり合うのが難しい。加えて指導する立場だから、私たちのような“支援”の発想に難色を示す先生もいます。「どうしてサボれるような場をつくるのだ」と。

井手氏 文化の違いは決定的な壁ですね。どう超えるのですか？

石井氏 先生の中にも、生徒ファーストを貫く方がいます。少数派ではありますが、その先生がキーパーソンとなり、私たちの考えを翻訳しながら他の先生方との橋渡し役を担ってくれます。壁の向こうにも仲間がいたことは、大きな発見でした。私の親が再婚と離婚を繰り返し、苗字が3回も変わりましたから、職員室みたいところは苦手でした。そうした「先生とは真反対な大人が、うちには必要だ」と感じてくれたら、学校側は招き入れてくれるようになります。その点は、私たちの発信力も問われるのかなと思いますね。

井手氏 馬場さんが施設の壁（塀）を壊したのは、やまゆり園事件が起きたタイミングでしたよね。セキュリティを壊すことにもなるし、反発も大きかったのでは。

馬場氏 私が壊した施設の壁は、先代の親がつくったものです。何のためにとすると、利用者を守ろうとしたのですよね。誰が壁をつくるのか、それはなぜなのかという背景、そして壁の向こうにどうアクセスし、向こうからアクセスしてもらうかを、私たちは考え続ける必要があります。やや語弊があるかもしれませんが、「差別は無知が引き起こす」とも言われます。でも知らないものは触れることがない限り、知ることはできません。壁をなくしたら、不審者が入ってくるかもしれないし、車が施設に突っ込むこともあるかもしれない。とはいえ何ごとともリスクはつきものだし、ベネフィットも存在します。それなら、まだ経験したことのないベネフィットにみんなで一緒に出会いにいこうと、音頭をとっていくのが私の役目ではないか。そう考えながら、職員たちと話をしましたね。



馬場拓也氏



名里晴美氏

名里氏 私自身、地域作業所で働くまでは、障がいに対して偏った見方をしていました。ご家族は悲壮感でいっぱいじゃないか、施設の職員は自身を犠牲にしているのではないかと。でも実際は違って、周りのごく普通の社会生活を営んでいる人ばかりでした。つまり、私自身が壁を築いていたのです。それに障がいを

持つ方とのやり取りもわざとらしくなく、実に普通な感じでした。その温かい雰囲気の中に私もいたいなと思ったのが、今につながっています。だからといって、これまでの価値観が一瞬で変わったわけではありません。日々の出会いや新しい気づきの中で、自分の壁を超えていくことが大事だと思います。

井手氏 先ほど馬場さんから、「無知が差別を生む」という言葉が出ました。やはり差別や偏見をなくすには、出会いの場と気づきの奇跡が大事なのでしょうか。



石井氏 校内居場所カフェは、いわば2.5プレイスなんですよね。学校というセカンドプレイスにサードの要素、つまり地域が入り込んでいるわけで。その“0.5”があることで、家庭、学校や職場などでは出会わなかった、壁の向こうの景色が見えて来る。地域の人からすれば、学校にはこんなにステキな子たちがいたんだと気づく。うまく場を構築しながら、出会いと気づきの奇跡が起こる確率を上げていくことが重要なのでしょうか。

井手氏 名里さんの日常は、まさに奇跡ですよ。重度の障がいでも言葉や態度で示せなくても、わずかな表情の変化を周りがちゃんと気づく。本当にすごいことです。名里さんは障がい者と過ごす時間を、居心地がいいと話していましたが、誰もが同じように思えるのでしょうか。

名里氏 私たちの施設では小中学校の見学や職業体験を受け入れたり、市民団体と緑化活動をしたり、施設でつくった製品を区が婚姻届を提出したカップルへの記念品に採用したりと、地域との接点を数多く設けています。特に子どもの頃の出会いは大きいですね。障がいを持つ人がいることが、当たり前になるので。彼らが大人になり、全員が福祉や看護の仕事に就くわけではないですが、縁あってうちの職員になった人もいます。

また運営する施設の20周年式典を、地元の中学校の体育館で行えたのは嬉しかったです。かつて「朋」の建設説明会を開いた場所です。横断幕をいただいたり、お祝いの言葉をかけてもらえたりと、当時とは正反対の温かな場となったのです。今も課題や苦しいことはありますが、地域の人たちと長く続けられたことなど、素晴らしいことにもいっぱい出会えます。

井手氏 障がいのある人がふつうに住んでいて、子どもたちが小さな頃から自然と受け入れられる街って素晴らしい。誰もが住みたくなりますね。

司会の渡辺さんと事前打ち合わせをしたときに、登壇される三人はヒーローのようだという話をしていました。でも本当は助けてくれる人がいなくても、一人ひとりが自由に生きていける世の中がベストなのですよね。みなさんは「あなただからできるんだ」、「私はあなたのようにはなれない」と、何度も言われているのではないのでしょうか。そうした言葉の持ち主、つまり諦めてしまった方々にはどのような声をかけますか。



石井氏 私のいる NPO には、「出会った責任をどう果たすか」というポリシーがあります。たとえば今日の動画をご覧になった方は、社会の壁を知ってしまった、すなわち出会った責任が生じたわけです。これをどう果たしていくは、人それぞれで構わないのだけど。

先ほど出会いと気づきの奇跡の話をしました。校内居場所カフェも高校生と出会うことで、地域のみなさんがその子たちを放っておけなくなってしまう。私たちがケアをする人たちが、奇跡のトリガーになっているんです。その出会いの仕組みを、いかに楽しく設けるかが私たちの役目なのかな。

馬場氏 私は今の仕事に就いて間もなく、職員がお亡くなりになったおばあさんのご遺体を、タオルで拭く様子にとっても驚いたんです。

「〇〇さん、体を横にしますね」「タオルが冷たくなっちゃったね。温かいのに変えるね」と、生きているときと同じように声をかけながら拭いていたから。そういう世界が広がっていることは、設立者の倅であっても中に入



って初めて知ることができたのです。ではその境遇になかった人たちに向け、誰がアクセサビリティの高いハブになれるのかといたら、やはりケアに携わる私たちではないかと。だから介護も保育も障がい者事業も、目の前の人たちをどうするかだけでなく、まだ見ぬ人たちに自分たちの営みを見せる、あるいはつないでいくというのを、並行してしっかり進めていく必要があるのではないかと。壁をしつらえずにハブになることに、ある種、勝手な使命感を持っているので、頑張りたいと思います。

名里氏 日ごろ障がいのある方と意思疎通を図る中で、通じ合えたときは本当に嬉しいし、同じ状況なら誰もがそうした気持ちになるだろうと確信しています。でも障がいの有無に限らず、誰のことも大事にされる世の中なら、みんなが幸せに生きられるのとは感じていて。そのために自分ができることをやっている。ただそれだけなんです。

井手氏 私たちは、はるか昔のご先祖様から続く命の連鎖によって、今を生きることができています。そこには喜びや悲しみ、痛みなどの経験も、丸ごと受け継がれているのです。“そこにいる”というだけで果てしなくすごいことであり、だからこそすべての人の命は絶対に粗末にされてはいけないと私は思うのです。



生きていくだけでも本当に大変な世の中で、ベーシックサービスやソーシャルワークによって少しでも楽に、楽しく生きられるようにしたいですし、一方ですべての人が「自分たちの周りをよくしたい」という使命感を持って過ごす世の中になったらいいですね。そうした社会の実現に向けて、これからも共に頑張りましょう。今日はありがとうございました。